北上川流域における縄文時代前期から中期の遺跡動態

総合科学研究科総合文化学専攻
地域文化リノベーションプログラム
G0218003　工藤美樹

要旨

本論の目的は、第一に盛岡市内に所在する畑井野遺跡出土の縄文土器の整理・報告すること、第二に岩手県内の北上川流域及びその支流域における縄文時代前期から中期の遺跡動態について検討すること、第三に畑井野遺跡の集落としての性格を検討することである。

分析対象となる遺跡は、184 遺跡である。既に市町村などから刊行されている発掘調査報告書や先行研究を基礎として、岩手県内の縄文時代前期から中期の北上川流域及び支流域に分布している遺跡の「立地」「標高」「時期」「出土遺物及び遺構」などのデータ構築を行った。そのデータを参考に、遺跡を時期や立地を考慮したうえで 17 の群（A 地区～Q 地区）に分類し、遺跡動態について考察した。そのうえで、拠点集落の動態と、畑井野遺跡が縄文時代前期から中期においてどのような性格を持った遺跡だったのかを検討した。

分析の結果、縄文時代前期前葉から前期中葉においては、どの地域でも当該期の遺物が出土しているものの、竪穴住居跡が見つかっている遺跡が少なく、あったとしても 1 棟ほどであることが多いのがわかった。前期後葉以降は、明確に拠点集落であったと判断することができる遺跡が増え、拠点集落の動態が 7 パターンあることが読み取れた。1 つ目は長期継続する拠点集落が形成される事例（単独）、2 つ目は長期継続する拠点集落が形成される事例（準拠点集落あり）、3 つ目はある程度の期間拠点集落が存続するとその近くに居住域を移す事例、4 つ目はある程度の期間拠点集落が存続するとその近くに居住域を移すがその後再び同一地点に回帰する事例、5 つ目は集落の立地の変化が複雑で、特徴の把握が難しい事例、6 つ目は長期継続せずにある特定の時期だけ拠点集落として利用される事例、7 つ目はある程度の期間拠点集落として利用されたのち時間をおいて再び同一地点に拠点集落を形成する事例である。

1・2 の事例については、岩手町から花巻市周辺に多い傾向がみられた。また、県南地域では拠点集落の周辺に準拠点集落がほとんど形成されていないということがわかった。3・4 の事例については、北上川本流付近ではなく、北上川支流が開析した土地に拠点集落が形成される傾向がみられた。支流によって開析された土地は、北上川が開析した平野部よりも狭く、居住に適したところも限られている。そのような環境的制限や狩猟・採集・近隣集落との交流をするうえでの利便性、人口などの要因が重なって拠点集落の立地は決定されていくと考えられる。5 の事例は、本論で対象とした地域で 2 か所あった。その 2 地点は、どちらも岩手県から秋田県側へ抜けることができる地域である。回廊的役割を担う河川の山岳地帯から平坦部に切り替わる地点には、一時的な拠点もしくはそれに付随する集落が形成される可能性が高い。

次に畑井野遺跡についてまとめる。畑井野遺跡は、岩手県盛岡市上米内字畑井野に所在する遺跡である。米内川右岸の丘陵上に立地しており、標高は約 250mである。台地下沖積低地との比高は約 50～60mで、南北に約 200m、東西に約 150mのほぼ独立した舌状台地を呈している。この台地は「米内館」または「蝦夷館」と呼ばれており、遺物の散布が認められるのに加えて、堀跡を現在でも確認することが出来る。これは平安時代以降の遺跡と考えられている。また、

畑井野遺跡が所在している台地は、現在ではほとんどが耕作地として利用されている。

この遺跡は発掘調査が行われる以前に山内清男によって踏査が行われており、そのとき採集された土器が大木式土器文化と円筒式土器文化が接する土器であることから、山内は草間俊一と吉田義昭にその土器が極めて興味深い資料であることを指摘していた。そして 1958 年に草間俊一と吉田義昭らによって発掘調査が行われており、多くの縄文土器が出土した。その土器は盛岡市遺跡の学び館と岩手大学教育学部の資料保管室に収蔵されている。また 2009 年からほぼ毎年、岩手大学考古学研究室に所属している学生らによって踏査が行われており、多くの縄文土器を拾っている。著者は、発掘調査と踏査によって得られた縄文土器を分析・図化を行い、畑井野遺跡が利用されていた時期や集落の性格を検討した。

分析の結果、畑井野遺跡が立地している丘陵上は、前期末葉～中期中葉（大木 6～8b 式期）において拠点集落として利用されたと考えられる。そして中期後葉から中期末葉の遺物・遺構が丘陵下に所在する上米内遺跡で検出されることから、拠点集落を高位面から低位面に移したと考えられる。よって畑井野遺跡は、拠点集落の動態としては 3 の事例が当てはまることがわかった。北上川によって形成された平野部に比べて、畑井野遺跡が所在する米内川流域は開析された土地が狭い。そうした環境が同一地点での拠点集落としての長期の継続性を阻害した可能性が高い。